

A	B	定 石	解 説	メ モ
		1. 低コスト	コストの考え方として初期コスト(インシヤルコスト)だけでなく運用コスト(ランニングコスト)にも目を向ける必要がある。機器などの購入費用は、福祉制度の利用ができれば、高い機器でも低コストにすることができる。	
		2. シンプル思考	技術好きなサポータは、より高い機能を求めるあまり、システムを複雑にしてしまいがちである。ひいては、ユーザ不在のサポートに陥る。	
		3. 入手が容易	特定の販売店しか入手できないものは極力避けよう。万が一、そこが店をたたんでしまったら、供給が途絶えてしまう。常に代替入手先があるかどうかを確認しよう。理想的には日本全国どこでも入手できるようなものを考えよう。特注品はコスト高になりがちである。可能な限り一般の市場に流れているものを検討しよう。	
		4. 誰もがサポータ	特殊技能を持った人だけがサポータになれると考えるのは間違いである。誰もが基礎的な知識を学ぶことでサポートできるような仕組みを目指そう。時として、町の電気屋さん、機械に不慣れな家族でもサポータになれるように。そのためには、知識や技能の文書化が必要。	
		5. 設置・設定・メンテが容易	特殊技能を要するサポートは極力避けよう。また、特定の技能者だけではなく、家族などもそのサポートに一部参加できるように工夫しよう。重大事故が起こる前に、その前兆を見いだせる唯一の強力なサポータかも知れない。	
		6. 習得が容易	機器操作などでは習得が容易になるように工夫しよう。必要に応じてステップに分け、今日はここまでのように、時間と日にちをかけながらステップアップしていけるように配慮する。手順を記憶に頼るのではなく、見える形に明示することも必要	
		7. 周辺環境への適応	支援している時間は一時だが、利用する人はその場所で生活している支援以外の環境(時間帯, 周囲の人の入れ替わり, 生活する部屋など)についても理解し、想像力をもってあたること。	
		8. 楽に使える	日々の生活はリハビリ訓練ではない。楽しんで無理せず楽しみながら使うことができることを念頭に置いたサポートをしよう。ただし、反面で身体機能低下につながる場合があるので、その点に注意を向け、必要に応じてポイントを押さえ伝えることが大切である。	